

# 格助詞・副助詞類の連続出現パターン

佐藤 理史 (名古屋大学大学院工学研究科)

## Successive Patterns of Kaku- and Fuku-Joshi in Japanese

Satoshi Sato (Graduate School of Engineering, Nagoya University)

### 1 はじめに

文を構成する基本ブロックとして「文節」を採用するのであれば、「どれだけの種類の文節が存在するか」を問うことは、自然な成行きである。もちろん、あらゆる可能な文節を列挙することは事実上不可能であるが、適度な抽象化と制約を持ち込めば、日本語の大部分の文節をカバーするリストを作ることは可能であろう。そのような考えのもと、我々は、いわゆる内容語を変数に抽象化した「文節パターン」を列挙することに取り組んでいる。

文節は、大きく、体言を中心とした文節と用言を中心とした文節に分けることができる。このうち、用言を中心とした文末文節は、文末機能表現シソーラスという形で、用言に付属する表現の列挙を進めてきた [1]。これに対して、本稿では、体言を中心とした文節に付属する表現—格助詞・副助詞類—に焦点を当て、それらが、どのような順序で出現しうるかを整理する。

これまで、国語学・日本語学において、助詞の研究は数多く存在する (たとえば、[2, 3, 4, 5] など)。しかしながら、研究の主眼は、助詞の分類と機能の解明にあり、助詞がどのように連続して出現するかについては、あまり注意が払われていない。一方、江副 [6] は、外国人に日本語を教える立場からこの問題に焦点を当て、「日本語の助詞は二列」という仮説を提示している。本研究では、まず、内省に基づき、格助詞・副助詞類の連続出現パターンに対する仮説を立て、その仮説を、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) のコアデータを用いて検証する。

### 2 対象とする助詞の選定

#### 2.1 助詞リストの作成

まず、次に示す 9 種類の文献と辞書から助詞を採取した。

1. 森田良行. 助詞・助動詞の辞典. 東京堂出版, 2007. (以下、[森田] と略記)  
目次より、70 種類の助詞を採取した。複数の箇所で参照されている場合でも、下位区分 (格助詞、副助詞等) が等しい場合は、1 つと見なした。
2. 国語教育プロジェクト編著. 原色シグマ新国語便覧 増補三訂版. 文英堂. 2012. ([シグマ])  
345 頁の表より、35 種類の助詞を採取した。
3. 国立国語研究所. 現代語の助詞・助動詞—用法と実例—. 秀英出版, 1951. ([国語研])  
第一部『助詞』より、109 種類の助詞を採取した。複数の下位分類を持つものは、下位分類のそれぞれを、1 つと見なした。
4. UniDic-2.1.0 ([UniDic])  
語彙素レベルで、助詞と定義されているもの 111 種類を採取した。
5. 益岡隆志, 田窪行則. 基礎日本語文法—改訂版—. くろしお出版, 1992. ([益岡・田窪])  
第 II 部第 9 章『助詞』に示されている 61 種類を採取した。複数の下位分類において示されているものは、それぞれを 1 つと見なした。
6. Juman-7.0 ([Juman])  
品詞が助詞である 96 種類を採取した。

表 1: 助詞の下位区分

[森田]	[シグマ]	[国語研]	[UniDic]	[益岡・田窪]	[Juman]	[JLPT]
格助詞	格助詞	格助詞	格助詞	格助詞	格助詞	格助詞 (類)
副助詞	副助詞	副助詞	副助詞	取り立て助詞	副助詞	副助詞 (類)
係助詞		係助詞	係助詞	提題助詞		
準体助詞		準体助詞	準体助詞			
並立助詞		並立助詞				
接続助詞	接続助詞	接続助詞	接続助詞	接続助詞	接続助詞	接続助詞
終助詞	終助詞	終助詞	終助詞	終助詞	終助詞	終助詞
		間投助詞				

- 国際交流基金, 財団法人日本国際教育協会 編著. 日本語能力試験出題規準【改訂版】. 凡人社, 1994. ([JPLT])  
文法 3・4 級の助詞として示されている 40 種類を採取した。
- Yoko M. McClain. Handbook of Modern Japanese Grammar. The Hokuseido Press, 1981. ([McClain])  
Particles で示されている 49 項目のうち、「か (Colloquial form of *shika*)」と「な (This *na* is not a particle)」を除く 47 種類を採取した。
- Naoko Chino. All About Particles. Kodansha International, 2001. ([Chino])  
目次に掲載されている 69 種類を採取した。

これらのうち、同一の助詞と見なせるものを集約し、最終的に、209 種類の助詞リストを作成した。なお、これらすべてを助詞とみなすべきかどうかは、別途検討が必要である。

## 2.2 助詞の下位区分

[McClain] と [Chino] を除く 7 つの文献・辞書において、助詞の下位区分が導入されている<sup>1</sup>。それらを表 1 に示す。7 つの文献・辞書に共通な下位区分は、格助詞、接続助詞、終助詞の 3 種類である。[益岡・田窪] では、副助詞・係助詞の類を、提題助詞と取り立て助詞に区分する。ただし、[益岡・田窪] に準拠している [Juman] では、これらの下位区分は採用されておらず、一括して、副助詞という下位区分に収められている。

副助詞と係助詞の区分を採用しているのは、[森田]、[国語研]、[UniDic] である。しかしながら、準拠関係にあると思われる [国語研] と [UniDic] の間においても、これらの下位区分が一致しないものが存在する。

以上のことより、副助詞と係助詞 (あるいは、取り立て助詞と提題助詞) の区別は、本研究では重視しない。副助詞類として一括して考える。

準体助詞という下位区分を立てるかどうかは、形式名詞との関係をどう考えるかに依存する。本研究では、助詞「の」はすべて特別扱いとし、本稿の検討対象外とする。

並立助詞を立てるかどうかは、主に、接続助詞との関係が問題となり、間投助詞を立てるかどうかは、終助詞との関係が問題となる。本稿の対象は、格助詞・副助詞類であるため、ここでは、これらの下位区分については立ち入らない。

## 2.3 対象とする 23 種類の助詞

表 2 に、本研究で対象とする 23 種類の格助詞・副助詞類を示す。これらは、9 種類の文献・辞書の過半数に収録されていた格助詞・副助詞類のうち、格助詞「の」を除いたすべてである。先に述べ

<sup>1</sup> [Chino] では、終助詞のみが明示的に区別されている。

表 2: 主対象とする 23 種類の助詞

		[森田]	[シグマ]	[国語研]	[UniDic]	[益岡・田窪]	[Juman]	[JLPT]	[McClain]	[Chino]
1	が	格	格	格	格助	格	格	格類 (4)	✓	✓
2	を	格	格	格	格助	格	格	格類 (4)	✓	✓
3	に	格	格	格	格助	格	格	格類 (4)	✓	✓
4	で	格	格	格	格助	格	格	格類 (4)	✓	✓
5	へ	格	格	格	格助	格	格	格類 (4)	✓	✓
6	と	格	格	格	格助	格	格	格類 (4)	✓	✓
7	より	格	格	格	格助	格	格	格類 (4)	✓	✓
8	から	格	格	格	格助	格	格	格類 (4)	✓	✓
9	まで <sub>1</sub>	格				格	格	格類 (4)	✓	✓
10	は	係	副	係	係助	提題/取り立て	副	副類 (4)	✓	✓
11	も	係	副	係	係助	取り立て	副	副類 (4)	✓	✓
12	でも	副	副	副		取り立て	副	副類 (4)	✓	✓
13	しか	係	副	係	副助	取り立て	副	副類 (4)	✓	✓
14	さえ	係	副	係	副助	取り立て	副		✓	✓
15	すら	係		係	副助	取り立て	副		✓	✓
16	まで <sub>2</sub>	副	副	副	副助	取り立て	副	副 (3)	✓	✓
17	こそ	係・副	副	係	係助	取り立て	副		✓	✓
18	など	副	副	副	副助	取り立て	副	副類 (4)	✓	✓
19	のみ	副		副	副助	取り立て	副		✓	✓
20	だけ	副	副	副	副助	取り立て	副	副類 (4)	✓	✓
21	ばかり	副		副	副助	取り立て	副	副 (3)	✓	✓
22	くらい	副		副	副助	取り立て	副	副 (3)	✓	✓
23	ほど	副		副	副助				✓	✓

たように、助詞「の」は特別扱いするため、ここには含めない。

この表に示すように、「まで」は、格助詞「まで<sub>1</sub>」と副助詞類「まで<sub>2</sub>」が存在する。ただし、[国語研]と[UniDic]では、格助詞「まで<sub>1</sub>」を認めず、副助詞類「まで<sub>2</sub>」のみを認める。

[益岡・田窪]は、助詞の章において、「ほど」への言及がない。他の章には「ほど」に対する記述があるが、「ほど」の品詞については、明示的な言及はない。[益岡・田窪]に準拠する[Juman]においては、「ほど」は副詞的名詞および接尾辞として定義されている。

以上のように若干の齟齬はあるが、9種類の文献・辞書における収録状況から判断して、これらを、格助詞および副助詞類の中核的要素と見なすことに問題はないと考える。

### 3 助詞の分類と出現パターン

#### 3.1 分類の方針

すでに述べたように、本研究の最終目標は、助詞が連続して出現するパターンを列挙し、可能な文節パターンの全貌を明らかにすることである。このために重要なのは、前後の接続関係—どのような語の直後に現れうるか、直後にどのような語が現れうるか—である。助詞の分類では、機能的・意味的側面が重要視されることが多いが、ここでは、それらにできるだけ立ち入らず、直前・直後の接続関係のみで助詞を分類することを試みる。

このような方針の背景には、もう一つの理由がある。それは、現在の形態素解析が、意味を考慮せず、品詞と前後の接続関係だけから形態素認定を行なうという事実である。すなわち、意味に基づく助詞の下位区分を導入しても、それは、形態素解析においては役に立たず、かつ、そのような下位区分は、形態素解析では正しく認定できないということである。[Juman]が、提題助詞と取り立て助詞を区分せず、一括して副助詞としたのは、それらの弁別が形態素解析においては不可能であるという

認識に基づくものと推察される<sup>2</sup>。

### 3.2 A 群の助詞

まず、次の2つのテストを設定する。

**Test1** 動詞のテ形の直後に、その助詞 X は出現するか？ (「テ→X」)

**Test2** その助詞 X の直後に、「の+体言」が接続するか？ (「X→の」)

前述の23種類の助詞のうち、これらの2つのテストの答がどちらも no である助詞は、「が」、「を」、「に」の3つである<sup>3</sup>。これら3つの格助詞は、直後に「の+体言」(連体助詞の「の」)の形をとらないという点において、他の格助詞と区別される。これらを、本稿では、**A 群の助詞**と定義する。

もちろん、次のような例を考えることはできる。

- (1) a. 「歩いて」がいい。
- b. 「歩いて」を楽しむ。
- c. 「歩いて」に違いない。

しかしながら、これらの例は、引用または省略(「歩いていくのがいい」)と見なし、通常の接続とは見なさない。

A 群の助詞は、連続して現れることはない。以降の分類は、この A 群の助詞(特に「に」)との接続を中心に考える。

### 3.3 B 群の助詞

次のテストを考える。

**Test3** A 群の助詞の直後に、その助詞 X は出現するか？ (「A→X」)

A 群の助詞のうち、「が」の直後には、助詞は出現しない。助詞「を」の直後には、「も」しか出現しない。それゆえ、このテストは、事実上、「に」の直後に出現するかを問うテストとなる。

このテストの答が no となる助詞は、次のとおりである。

- (a) 「で」、「へ」、「と」、「より」、「から」、「まで<sub>1</sub>(格助詞)」
- (b) 「ほど」

なお、「にまで」には、次のような例があるが、この「まで」は、「まで<sub>2</sub>(副助詞)」と見なす。

- (2) その知らせは、学校にまで届いた。

本稿では、上記の(a)の助詞を**B 群の助詞**と定義する。副助詞「ほど」の判断は、一旦保留とし、後で検討する。

B 群の助詞は、原則として、動詞のテ形に後続しない(Test1: no)。ただし、テ形に接続する「から」に対する判断(格助詞とみなすか、接続助詞とみなすか)は保留とする。

- (3) 書いてから提出する

なお、「まで」には、次のような例があるが、これは B 群の助詞の出現例とはみなさない。

- (4) 走ってまでして、追いかける必要はない → 「まで<sub>2</sub>(副助詞)」と見なす

<sup>2</sup> 益岡・田窪では、助詞「は」は、提題助詞と取り立て助詞の両方に区分される。

<sup>3</sup> テストに対する判断は、特に言及しない限り、筆者の内省に基づく。

B 群の助詞には、「の」が後続する (Test2: yes)。同時に、B 群の助詞は、自然さの度合に差はあるが、直後に A 群の助詞をとる (後述の Test4: yes)。

- (5) a. 学校 から を起点にする。
- b. 学校 まで をゴールとする。
- c. 申請は、本人 より を基本とする。
- d. ?通知は、本人 へ を優先する。
- e. ?参加は、子供 と を原則とする。
- f. ?試験の実施は、教室 で を原則とする。

### 3.4 C 群および D 群の助詞

残った助詞の Test3 の答は yes である。そこで、さらに、次のテストを考える。

**Test4** その助詞 X の直後に、A 群の助詞は出現するか? (「X → A」)

残りの助詞に対する答は、次のとおりである。

- 1. no — 「は」、「でも」、「しか」
- 2. 「が」のみが出現する — 「も」
- 3. yes — 「さえ」、「すら」、「まで<sub>2</sub>(副助詞)」、「こそ」、「など」、「のみ」、「だけ」、「ばかり」、「くらい」

以下に示すように、「も」は「が」の直前に現れることがある。

- (6) a. 誰 も が驚いた
- b. 彼まで も が反対した
- c. 彼女さえ も が反対した

最初の例は、「誰も」全体が一語であり、「も」はもはや助詞と見なせない可能性がある。残りの 2 例は、「までもが」と「さえもが」という形式であり、この形式は固定的である。以上のことから、「も」を、yes の仲間ではなく、no の仲間と考える。最終的に、「は」、「でも」、「しか」、「も」を C 群の助詞、残りの助詞を D 群の助詞と定義する。なお、先ほど保留とした「ほど」も、総合的に判断して、D 群の助詞に含める。(その理由は後に述べる。)

C 群の助詞は、(前述の「もが」の場合を除いて) A 群の助詞の前には現れず (Test4: no)、後ろに現れる (Test3: yes)。これに対して、D 群の助詞は、以下の例に示すように、A 群の助詞の前にも (Test4: yes)、後ろにも (Test3: yes) 現れる。(「ほど」は、例外的に、後ろには現れない。)

- (7) a. 彼 だけ に伝える。
- b. 彼に だけ 伝える。

D 群の助詞は、B 群の助詞の前に現れうる。

- (8) a. その話は、彼 だけ から聞いた。
- b. 彼 だけ へ手紙を出した。
- c. 会場は、その教室 だけ で十分である。

C 群および D 群の助詞は、「くらい」、「ほど」を除き、動詞のテ形に後続する (Test1: yes)

- (9) a. 書いて は いるのだが。

表 3: 助詞の分類

	Test1 テ→X	Test3 A→X	Test2 X→の	Test4 X→A	
A 群	no	no	no	no	が、を、に
B 群	no	no	yes	yes	で、へ、と、より、から、まで <sub>1</sub>
C 群	yes	yes	no*	no*	は、でも、しか、も
D 群	yes	yes*	yes	yes	さえ、すら、まで <sub>2</sub> 、こそ、など、のみ、だけ、ばかり、くらい、ほど

\*は例外があることを示す。

(連用修飾の場合) 体言 + D 群 + B 群 + A 群 + D 群 + C 群

(連体修飾の場合)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{体言} + \text{D 群} + \text{B 群} + \text{D 群} \\ \text{数量表現} + \text{も} \end{array} \right\} + \text{の} + \text{体言}$

図 1: 格助詞・複助詞類の出現順序パターン (仮説)

- b. 書いて さえ くれれば。  
c. ?毎回、出席して だけ いれば、単位は楽勝だ。

C 群の助詞は、原則として、「の+体言」を後続しない (Test2: no)。「も」は、例外的に「もの+体言」の形をとるが、この例外は、数量表現に限られるようである。

(10) 100 万個 も の注文

D 群の助詞は、「の+体言」を後続する (Test2: yes)。たとえば、「すら」には、BCCWJ に次のような実例がある。

(11) 名前 すら の公表を拒み

「さえ」の実例は、BCCWJ では発見できなかったが、上記の例の「すら」と交換できる可能性が高い。

### 3.5 連続出現パターンに対する仮説

以上の分類結果をまとめると表 3 のようになる。この表から明らかなように、Test1 と Test3 の答、Test2 と Test4 の答は、いずれも一致する。すなわち、A 群から D 群の 4 種類に分類するだけであれば、結果的には、Test1 と Test2 の 2 つのテストで十分だったということになる。

しかし、連続出現パターンを明らかにするという観点からは、Test3 と Test4 が重要である。これらのテストと Test2 の結果より、図 1 に示すような、出現順序が予想されることとなる。

## 4 BCCWJ を用いた仮説検証

上記の仮説を BCCWJ のコアデータを用いて検証する。具体的には、以下の手順で行なう。

1. BCCWJ のコアデータ (解析済) から、次の条件を満たす助詞列を取り出す。

- (a) 助詞列の直前は、名詞または代名詞。  
(b) 助詞列は 2 個以上の助詞から構成されている。

表 4: 助詞の連続パターン (連体修飾の場合)

名詞	代名	列	D 群	B 群	N 群	代名詞+助詞列
662	11	BN	への		へ.B の.N	
497	12	BN	との		と.B の.N	
352	11	BN	での		で.B の.N	
224	15	BN	からの		から.B の.N	
105	65	DN	までの	まで.D (まで.B)	の.N	これまでの
432	2	DN	などの	など.D	の.N	
30	22	DN	だけの	だけ.D	の.N	これ/それ/どれだけの
25	7	DN	ほどの	ほど.D	の.N	
14	9	DN	くらいの	くらい.D	の.N	
11	0	DN	のみの	のみ.D	の.N	
8	0	DN	ばかりの	ばかり.D	の.N	
6	0	DBN	などへの	など.D	へ.B の.N	
5	0	DBN	などとの	など.D	と.B の.N	
4	0	DBN	などでの	など.D	で.B の.N	
19	20	CN	もの		*も.C の.N	いつもの

注：\*は例外を表す。括弧は別解釈の可能性を示す。

(c) 助詞列を構成する助詞は、前述の 23 種類に、格助詞「の」を加えた 24 種類とする。ただし、BCCWJ は UniDic に基づいて短単位解析されているため、格助詞「まで」と副助詞「でも」は存在しない。前者は、副助詞「まで」、後者は、格助詞「で」+係助詞「も」と解析されている。

2. 取り出した助詞列の頻度を数える。頻度は、直前が名詞の場合と、代名詞の場合に分けて集計する。

頻度を、直前が名詞の場合と、代名詞の場合に分けて集計するのは、直前が代名詞の場合は、通常とは少し異なる振舞いを示すことがあるからである。たとえば、「いつも」は、短単位辞書 UniDic では一語とみなされず、「いつ(代名詞)+も(係助詞)」と解釈される。このため、「いつもの」は、「も+の」という助詞の連続を含むことになる。

順序が逆になるが、まず、「の」を介して体言に接続する連体修飾の場合の集計結果を表 4 に示す。ここでは、直前が名詞の場合が、3 回以上観察されたものを示した。なお、「の+体言」の「の」を、便宜上、N 群の助詞とした。この表から、次のことが観察される。

- B 群と N 群の間には、D 群の助詞が入ることができるはずだが、BCCWJ のコアデータにおいては、観察されなかった。このことから、連体修飾文節においては、D 群は B 群の前に現れるのが典型的であり、後に現れるのはまれであると考えられる。
- 「までの」の「まで」は、格助詞または副助詞類のいずれの可能性も考えられる。実際に実例を調査すると、どちらの例も観察された。
- 「もの」は、C 群の助詞が現れるという点において、例外的なパターンである。しかしながら、「いつもの」以外の例は、すべて「数量表現+もの」であった。

次に、連用修飾の場合の集計結果を表 5-6 に示す。ここでも、直前が名詞の場合が、原則として、3 回以上観察されたものを示した。これらの表から、次のことが観察される。

- 前節で示した、助詞の出現順序の仮説に沿う形で、助詞は出現している。ただし、D 群、B 群+A 群、D 群+C 群の 3 つのブロックに分けて整理するのが良さそうである。これらのブロックに、2 個の助詞が入ることは、可能ではあるが、まれである。

表 5: 助詞の連続パターン (連用修飾の場合 その1)

名詞	代名	抽出列	(並立)	D 群	B 群	A 群	D 群	C 群	(引用)
137	0	DA などが	と.B	など.D		が.A			
34	5	DA だけが		だけ.D		が.A			
16	2	BA とが				が.A			
15	3	DA こそが		こそ.D		が.A			
11	4	DA まだが		まで.D	(まで.B)	が.A			
4	0	DA ばかりが		ばかり.D		が.A			
3	0	DA のみが		のみ.D		が.A			
*1	34	CA もが			*も.C	が.A			
*1	0	DCA までもが		まで.D	*も.C	が.A			
313	0	DA などを	と.B	など.D		を.A			
30	2	DA だけを		だけ.D		を.A			
14	0	BA とを				を.A			
13	1	AC をも				を.A		も.C	
8	0	DA のみを		のみ.D		を.A			
7	0	DA ばかりを		ばかり.D		を.A			
5	0	DA までも		まで.D	(まで.B)	を.A			
3	0	DA くらいを	くらい.D		を.A				
2022	114	AC には	と.B			に.A		は.C	
673	60	AC にも				に.A		も.C	
200	0	DA などに		など.D		に.A			
136	25	DA ままでに		まで.D	(まで.B)	に.A	まで.D		
47	0	AD にまで				に.A			
36	9	DA だけに		だけ.D		に.A		しか.C	
20	2	AC にしか				に.A			
8	0	DA のみに		のみ.D		に.A			
8	0	BA とに				に.A			
7	0	DAC などにも		など.D		に.A		も.C	
7	0	DAC ままでには		まで.D	(まで.B)	に.A		は.C	
7	0	AD にさえ				に.A	さえ.D		
6	1	DA くらいに		くらい.D		に.A			
6	1	DA ほどに		ほど.D		に.A			
5	0	AB にと				に.A			と.B
4	0	AD にこそ				に.A	こそ.D		
3	0	DAC などには	など.D		に.A		は.C		
3	0	AD にばかり			に.A	ばかり.D			
1675	92	BC では	と.B			で.B		は.C	
672	240	BC でも				で.B		も.C	
147	0	DB などで		など.D		で.B			
46	17	DB だけで		だけ.D		で.B			
13	2	DBC だけでは		だけ.D		で.B		は.C	
13	0	DBC などでは		など.D		で.B		は.C	
13	0	DBC などでも		など.D		で.B		も.C	
12	0	BC でしか				で.B		しか.C	
10	3	DBC だけでも		だけ.D		で.B		も.C	
9	0	DB くらいで		くらい.D		で.B			
6	0	DB のみで		のみ.D		で.B			
6	0	BD でさえ				で.B	さえ.D		
5	0	DB ほどで		ほど.D		で.B			
5	0	DB ままで		まで.D		で.B			
5	1	BBC とでは				で.B		は.C	
5	0	BD ですら				で.B	すら.D		
3	0	DBC のみでは	のみ.D		で.B		は.C		
3	0	BB とで			で.B				
3	0	BD でこそ			で.B	こそ.D			



表 6: 助詞の連続パターン (連用修飾の場合 その 2)

名詞	代名	抽出列	(並立)	D 群	B 群	A 群	D 群	C 群	(引用)
78	0	BB	へと		へ.B				†と.B
8	2	BC	へは		へ.B			は.C	
7	0	BC	へも		へ.B			も.C	
3	0	DB	などへ	など.D	へ.B				
326	9	BC	とは		と.B			は.C	
87	72	BC	とも		と.B			も.C	
21	0	DB	などと	など.D	と.B				(と.B)
10	1	DB	までと	まで.D	と.B				(と.B)
7	0	BC	としか		と.B			しか.C	
4	0	DB	だけと	だけ.D	と.B				(と.B)
4	0	DB	のみと	のみ.D	と.B				(と.B)
92	33	BC	よりも		より.B			も.C	
16	0	BC	よりは		より.B			は.C	
118	22	BC	からは		から.B			は.C	
55	22	BC	からも		から.B			も.C	
33	0	DB	などから	など.D	から.B				と.B
4	0	BB	からと		から.B				
4	0	BBC	からでも		から.B			†でも.C	
58	28	DC	までは	まで.D	(まで.B)			は.C	
7	28	DC	までも	まで.D	(まで.B)			も.C	
4	1	DD	くらいまで	くらい.D	†まで.B				
3	0	DC	までしか	まで.D	(まで.B)			しか.C	
69	2	DC	などは	など.D				は.C	
60	1	DC	なども	など.D				も.C	
41	4	DC	だけは	だけ.D				は.C	
13	2	DC	くらいは	くらい.D				は.C	
8	1	CB	へと					は.C	と.B
7	0	DC	くらいしか	くらい.D				しか.C	
6	1	DC	さえも	さえ.D				も.C	
4	0	DC	こそは	こそ.D				は.C	
4	0	DC	ばかりは	ばかり.D				は.C	
3	0	DC	だけしか	だけ.D				しか.C	
3	0	DD	などなど	など.D など.D					
3	1	DC	ほども	ほど.D				も.C	

注：\*は例外を表す。括弧は別解釈の可能性を示す。†は注意が必要な箇所を示す。

- 「まで」を格助詞 (B 群) とすべきか、副助詞類 (D 群) とすべきかは、多くの場合、前後の接続関係だけからは決定することができない。
- 助詞「と」には、注意が必要である。格助詞「と」以外にも、並立助詞の「と」や、引用の「と」が考えられる。並立助詞や引用の「と」は、表に示したように、DBADC の並びの外にあると考えるのがよさそうである。ただし、前後の接続関係だけからでは、どの「と」であるかは、決定できない場合が存在する。
- 「へと」の「と」をどう解釈すべきかは、よくわからない。
- BA 群のブロックの後ろに出現する D 群の助詞は、直前の助詞によって限定されるようである。連体修飾文節の場合も勘案すると、D 群の助詞の標準的な位置は BA 群のブロックの前であると考えるのが自然である。つまり、A 群の後ろにしか現れないのが C 群の助詞で、A 群の前に現れるのが D 群の助詞と区別するのがよさそうである。(「ほど」を D 群に含めたのは、このような判断に基づく。)
- 「今からでも」の「でも」は、「で (B)+も (C)」ではなく、「でも (C)」とみなすのがよさそうであるが、すべての「からでも」をそうみなしてよいかは、もっと多くの事例を観察する必要

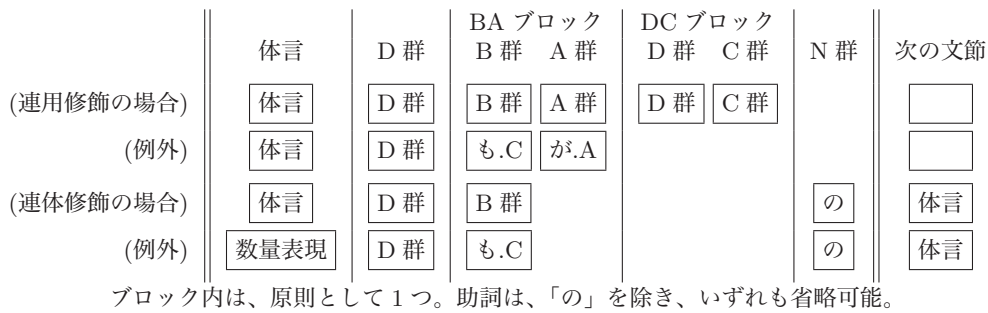


図 2: 格助詞・副助詞類の出現順序パターン (現時点での結論)

がある。

- 「もが」のほとんどは「誰もが」であるが、「大企業の 85%もが」という例が存在した。さらに、「そこに住まう人間までもが」という例も存在した。助詞「が」は、「も」を含め、直後に副助詞類をとることができない。そのため、例外的に「も」が、「が」の直前に位置に挿入されるのではないかと考えられる。連体修飾の「もの」を含め、「もが」と「もの」は注意が必要である。

## 5 暫定的な結論

現時点での暫定的な結論を、図 2 に示す。ここで、「暫定的」としたのは、次の理由による。

- 副助詞類は、動詞のテ系の直後に出現する。基本形・タ形に接続するものもある。これら、用言に接続する場合の連続出現パターンを整理する必要である。(このためには、並行して、接続助詞の整理も不可欠である。)
- 代名詞がからむ、いくつかの問題を整理する必要がある。たとえば、「いつも」は 1 語とみなすべきか、あるいは、「いつ+も (副助詞類)」とみなすべきか。

今後は、これらの問題を検討し、格助詞・副助詞類の連続出現パターンについて、最終的な結論を得たいと考えている。

謝辞 本研究では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用した。本研究は、JSPS 科学研究費基盤研究 (B) 「平易な日本語表現への工学的アプローチ」(課題番号 24300052) の助成を受けている。

## 参考文献

- [1] 松木久幸, 佐藤理史, 駒谷和範. 文末機能表現ソーラスと述部正規化システム. 第 2 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, pp. 185–194. 国立国語研究所, 2012.
- [2] 森田良行. 助詞・助動詞の辞典. 東京堂出版, 2007.
- [3] 奥津敬一郎, 沼田善子, 杉本武. いわゆる日本語助詞の研究. 凡人社, 1986.
- [4] 田中章夫. 助詞 (3). 岩波講座 日本語 7 文法 II. 岩波書店, 1977.
- [5] 国立国語研究所. 現代語の助詞・助動詞—用法と実例—. 秀英出版, 1951.
- [6] 江副隆秀. 日本語の助詞は二列. 創拓社出版, 2007.